

1. はじめに

シアトル小児病院は兵庫県立こども病院と姉妹病院であり、私達医師 3 名、看護師 1 名は 2011 年 3 月に 4 週間、シアトル小児病院を見学させていただきました。

私は滞在中 1 週間に 1 名、4 週間で計 4 名の整形外科医につきながら見学させていただきました。多くのことを見聞きする機会に恵まれました。その中でも特に印象的だった部分について報告いたします。



院内の廊下 子供達のために楽しい絵が描かれている

2. シアトル小児病院整形外科の歴史

シアトル小児病院は、1907 年に “Children’s Orthopedic Hospital” という、小児整形外科病院として創設されました。創始者である Anna Clise という女性は、自身の 5 歳の息子を整形外科疾患により亡くしシアトルに小児整形外科病院が必要だと強く感じたことから、市民に呼びかけて寄付を募り、病院設立に至りました。その後、整形外科に加え多くの科が集まる、現在のシアトル小児病院となりました。現在、シアトル小児病院整形外科は attending staff(いわゆる指導医、正規職員)の医師 8 名、resident(研修医)の 8 名に加え、4 名のフェローの計 20 名の医師が勤務し、年間手術は約 1500~1800 件施行されています。



創始者 Anna Clise 氏



創設当時の療養風景 院内の庭園で

3. 多くの職種とその役割

シアトル小児病院整形外科は医師数、手術件数ともに、兵庫県立こども病院のちょうど5倍にあたる規模です。しかし数の違いこそあるものの、疾患の種類や手術内容、医療のレベルについては、大きな差は無いというのが実感でした。

一方、日本にはまだ存在していない資格を持つ、多くのコメディカルスタッフが働いており、この点に関しては大きく異なると感じました。



広い手術室 器械や術式は日本とほぼ同じ

医師の補助をする **Physician assistant** (以下 PA) は各科に複数名が配属されており、医師の元で、薬剤の処方や手術室での鉤引きや閉創(縫合)まで行います。知識についてもかなり専門的なことまで理解して仕事をされており、カンファレンスにも必ず出席し発言もされていました。また看護師のさらに上級の資格を有する **Nurse practitioner** (以下 NP) も、薬剤の処方や検査オーダーなども行い、クリニックの開業も可能です。PA や NP は国家資格を有する専門職であり、業務内容は一般的に日本の研修医がしているものと似ています。

具体例としては、病棟の NP であれば、朝、昼、晩と回診を行い、必要に応じて、検査を行い、点滴などを処方します。家族からの質問も答えられる範囲で答え、NP がわからないことや今後の治療方針などの確認を、**attending staff** に確認します。NP が広い病院の階段を走って移動し、持参の院内携帯電話が鳴り止まない様子はまさに日本の研修医を彷彿とさせる光景でした。しかし異なる点は、NP は生涯かけて従事する専門職として究めているため、その道のエキスパートになっている点でした。シアトル小児病院整形外科は **resident** の教育機関としての役割があるため、各 **resident** は6ヶ月しかおらず、すぐ別の病院に移動となるそうです。そのため **Attending staff** にとっても、NP は時として **resident** 以上に頼れる存在であり、NP 自身もその仕事に誇りを持っているようでした。

他にもギブスを巻く専門職(**Casting technician**)や、看護師とは別に手術室の器械出し専門職、**Medical assistant(MA)**, **Administrative assistant**, **Clinic manager**, **Surgery scheduler** などが、日本では医師または看護師が行う業務を、専門的に行っていました。

一方、**resident** は基本的には指導医とペアとなって外来と手術の指導を受けています。一日の過ごし方としては、朝6時に病棟回診に出勤し、毎朝7時から整形外科の中で行われる研修医用の講義を1時間近く受け、その後手術か外来業務に就きます。処方や検査オーダー、書類作成などで呼ばれることは無

いため、まさに研修に集中できるシステムとなっています。

Attending staff も、同様に本来の業務に集中でき、結果として外来診察での説明に時間をかけることや、resident の教育、自分の研究に時間を割くことが出来ていました。医師不足と言われる日本も単純に医師を増やすだけでなく、このような専門職を導入することが一つの道ではないかとも感じました。



充実した設備が整っている (いくつもあるリハビリ室の1つ)



院内学級の部屋

4. おわりに

シアトル小児病院での研修を通して、日本との違いや共通点を発見しながら、アメリカの医療を実際に見学できたことは、論文や学会を通じて得られるものとは異なる貴重な経験でした。そしてこのような形で、同じ小児整形外科に従事している多くの方々と出会い、交流し、意見を交換できたことも得がたい貴重な機会でした。渡米の前は、自身の英語の問題をはじめ、色々と不安に思いながらの参加でしたが、シアトル小児病院 Melzer 副院長や整形外科部長の Conrad 先生、他すべてのスタッフが（例外なく！）笑顔で温かく迎えてくださり、常に親切に対応してくださったことにより実現されたものと、心より感謝いたしております。

最後になりましたが、中村肇前院長、丸尾院長をはじめ、西島副院長、田中亮二郎先生ほか国際交流委員会の方々、ご支援いただいている神戸万国医療財団、兵庫県ワシントン州事務所の北岡孝統所長、1ヶ月間もの留守を許してくださった当院整形外科のスタッフ、他、お世話になったすべての方に、深く感謝いたしますとともに、今後も絶えることなくシアトル小児病院との交流が続くことを心より願っております。